

八五郎の恋

野村胡堂

一

「親分、近頃つくづく考えたんだが――」

ガラッ八の八五郎は柄がらにもない感慨無量かんがいむりょうな声を出すのでした。

「何を考えやがったんだ、つくづくなんて面つらじゃねえぜ」

銭形平次は初夏の日溜りを避けて、好きな植木の若芽をいつくしみながら、いつもの調子で相手になっております。

「大した望みじゃねえが、つくづく大名になりてえと思ったよ、親分」

「何？ 大名になりてえ、大きく出やがったな、畜生ッ」

平次はそう言いながら、楓林ふうりん仕立ての盆栽ぼんさいの邪魔な枝を一つチヨンと剪きりました。

「第一、お小遣いに困らねえ」

「なるほどね、大名衆がお小遣いに困った話はまだ聞かねえ」

平次もそんな事を言うのです。植木に夢中になって、八五郎の哲学などは、どうでもよかったのでしよう。

「お勝手元不如意と言ったところで、こちとらのように、八文の湯銭に困るなんてことはねえ」

「よほど困ると見えるな、八」

「へエ、お察しの通りで」

八五郎は、ポリポリ頸筋を掻きました。

「呆れた野郎だ。大名高家を引合に出して、八文の湯銭をせびる奴もねえものだ」

そう言いながらも平次は、お静を眼で呼んで、あまり沢山は入って居そうもない自分の財布を持って来させるのでした。

「済まねえ、親分、湯銭と髪銭と、煙草をひと玉買いさえすりやいいんで、——そんなに要りやしませんよ」

「まア、取って置くがいい。大名ほどの贅^{ぜい}は出来めえが、それだけありや、町内の人参湯で一日茹^ゆっていられるだろう」

「ヘッ、済まねえなア、——それじゃ借りて行きますよ。ね、親分、お小遣はまア、親分から借りるとして」

「まだ不足があるのかい」

「大名の話の続きだが、——夏冬の仕着^{しきせ}にも不自由はなく」

「仕着せだつてやがる」

「質屋の出し入れがないだけでも、どんなに気が楽だか解らねえ。

その上、出入^{ではいり}はお駕籠、百姓町人に土下座をさせて、気に入らねえ奴があると、いきなり無礼討だ」

「気に入った女は、いきなりしよつ引いてお部屋様だろう」

「そ、それを言いたかったのさ、ね、親分」

ガラッ八は少し相好^{そうこう}を崩して長い顎^{あご}を撫でます。

「馬鹿野郎、また何処かの小格子の化け損ねた狐のようなのはまり込みやがったんだろう」

「そんな玉じゃありませんよ。あつしがしよつ引いて来たいのは先ず——」

「煮売屋のお勘子だろう、ちゃんと探索が届いているよ。手前^{てめえ}が買いに行くと、お煮^{にしめ}べが倍もあるんだつてね」

「馬鹿にしちやいけません。あんな小汚いのはこちらで御免だ——まずこの八五郎がしよつ引いて手活けの花と眺めたいのは——」

「大きく出やがったな」

「横町の中江川平太夫の娘お琴ことさん」

「わッ、助けてくれ」

平次は大仰な身ぶりをしました。横町の中江川平太夫というのは、北国浪人で六十幾つ、髪が真白な上、進退不自由の老人ですが、界限切つての物持ちで、その上、養い娘のお琴は、少し知恵は足りないと言われておりますが、見てくれだけは、凄いほどの美人でした。

これ位の娘になると、ガラッ八とは大釣鐘おおつりがねに提灯で、どう間違つても一緒になれっこはありません。ガラッ八が冗談の題目にしたのも、平次がすつ頓狂な声を出したのも、掛け合いばなしの程度以上のものではなかったのです。

二

その頃、神田、日本橋、下谷へかけて、通り魔のように荒し廻る兇賊がありました。

仲間という者を持たぬ、たった一人の仕業のようですが、梁はりを渡り、庇ひさしを伝い、天窓を切破り、格子を外し、鼠ねずみか鼯いたちのように忍び込んで、人を害あやめ、財かすを掠め、姿も形も見せずに煙の如く消えてしまふのです。

腕も拔群ですが、何よりの特色はその軽捷けいしやうな身体で、もう一つの特徴は、妨さまたげる者は殺さずんば已やまない、鬼畜きんしやくの如き残酷性さんくしやうでした。

盗られた金は何千両、傷きずけられ、殺された人も三人や五人では

ありませんが、あまりの神出鬼没ぶりに、銭形平次も手の下だしようがなかったのです。

町内では、夜廻りを増し、時候外れの火の番をおき、鳶の者まで動員して、曲者狩に努めました。冬からの跳梁を指を啣えて眺めるばかり、嘗て曲者の姿を見た者もなく、よしんば見た者があるにしても、その場で斬られるのが落ちで、怨嗟と恐怖が、下町一パイに、夕立雲のように拡がって行くのを、どうすることも出来ない有様でした。

「親分、やられましたよ」

八五郎が飛込んで来たのは、その翌日の朝。

「何がやられたんだ」

「中江川さんのところへ、あの泥棒が入りましたよ」

「えッ、そいつは大変だ」

平次は羽織を引っかける隙もなく、草履を突っかけて飛んで行きました。其処からほんの二三町。

「退いた退いた、見世物じゃねえ」

ガラッ八が群がる弥次馬を追っ払う中へ、平次は熱い物がさめない中に——と言った大あわての調子で飛込んだのです。

「あ、銭形の——よく来て下すった、この通りの始末だ」

おろおろするのは、主人の中江川平太夫、見事な銀色の毛を申訳ほどの鬘に結って、物を言う度毎に、言葉のリズムに乗って、首がブルブルと顫えます。

「あッ、これはひどい」

切り破られた引窓、そこから例の手で、紐を伝わって、猿の如く忍び込んだ曲者は、ちょうど、目を覚して飛起きた、娘のお琴

をひと当て、猿轡さるぐつわを噛かませた上、雁字がんじがらめにして、そのまま家中を捜したのでしょう、滅茶滅茶にかき乱した中へ、朝の光がうらうらと射し込んで、世にも不思議な対照を見せております。

平次はまだ縛られたままになって居る娘のお琴を引起すと、菜な切庖丁きりを持って来て、バラバラと縄を切りほぐし、それから猿轡さるぐつわを取って、

「どうなすった、お嬢さん、——飛んだ災難でしたね、——見たこと聞いたこと、詳しく話して下さいな」

ガラッ八に雨戸を開けさせ、乱れた娘の衣紋まで直してやりながら、平次は物柔かに問い進みました。

「何にも知りません、——気が付いた時は床の中から引出されて、こんなに縛られておりました」

「引窓をコジ開ける音とか、此処へ入って来る様子とか、——そんなものに気が付きやしませんか」

「いえ」

娘は美しい顔を上げます。気が緩ゆるんだせいとか、恥かしい姿を、平次やガラッ八の前にさらした口惜くやしさのせいとか、ポロポロと涙が、睫毛まつげをあふれて、少し蒼ざめて居りますが、それでも、存分に豊かな若い頬を濡らします。

年の頃、せいぜい十九、二十歳、無表情で整い過ぎて、少し白痴ちび美に近い美しさですが、魂の通った人形を見るようで、それがまた限らない魅力でもあります。

寝巻の上へ衿を引っ掛けて、その上からキリキリと縛られて、様子を見ると、暁方夢中で小用にでも起きたところを曲者あてに当身を喰みわされ、そのまま縛り上げられた顛倒のうちに、後にも先も

忘れてしまったのでしよう。

「それにしても、私が来るまで、よく縄を解かずに置いてくれました」

平次は結び目を残して切った細引を、そのまま自分の袖に落しながら、中江川平太夫を顧みかえりました。

「何かのお役に立とうと思ってな、縄を解いたり、雨戸を開けたりしちゃ、証拠を皆な掻き消すようなものだから」

平太夫は老巧らしくそう言うのです。

「ところで、盗られなすったのは？」

「大したことではない。当座の小遣のつもりで、出して置いた十二三両と、明日本郷の地所を求める約束で、用意した手付てつけが五十両、合わせて六十二三両ほどじゃ、——そんな事で済むなら、世間を騒がせる迄もないと思ったがな」

大したことではないと言うのが六十何両、この浪人の裕福さは、予て聞かねいておりますが、八文の湯銭に困ったガラッ八は、顎を撫でながら平次と顔を見合せます。

「あなたは、何にも御存じなかったの？」

さんざん荒らされた部屋の中を見廻しながら、平次はこの頼み少ない老人を見やりました。

「耳も眼も遠いから、滅多なことでは気がつきませんよ、——尤も気がついて、なまじ腕立てなどをしたら、私の身体が危なかったかも知れない」

「――」

心細い侍——そんな事を考えながらも、ヨボヨボの中江川平太夫を非難する気にはなれません。

「こんな事を言つては変だが——いや、平次親分だから言うが、金の在高ありだかが知れると私の命がないかも知れない。わずか六十両や七十両で済めば、——」

中江川老人はそう言つて、真白な頭をブルブルふるわせるのでした。

曲者の入った跡から、逃げた出口まで、平次は入念に見廻しました。物置の後には九つ梯子はしこがあるのに、曲者はそれに氣のつかなかったものか、物干場から物置の屋根に上り、そこからお勝手の上へ出て、引窓をコジ開けて入ったのは、この曲者の手形のような手順です。

庇ひさしの上は埃で汚くなっているのに、家の中に足跡のないのは、用心深く履物はきものを懷へでも入れたのでしょうか。お琴を縛つて、次の間を荒し抜いた上、主人平太夫の寢間は覗いても見ずに、そのまま縁側から出たのは、年を取つても二本差などには触れない、いかにも賢いやり口です。

「脅おどかすわけじゃありませんが、この様子じゃ、もう一度入るかもわかりませんよ」

平次は一通り見た上で、こんな不気味なことを言うのでした。
「そんな事は？」

中江川平太夫はさすがにギョツとした様子です。

「用心なすつて下さい」

「私はこの通り身体がきかないから、氣ばかりあせつても、何の役にも立たない。女子供じゃ、泥棒の入った後へ来るのは氣味が悪いだろうし、——若い者じゃ、娘があるから泊めるわけに行かない。お氣の毒だが平次殿、しばらく此処へ泊つては下さらぬか、

錢形の親分御宿と聞いたら、石川五右衛門でも寄り付くことではあるまい」

そんな洒落を言いながらも、中江川平太夫は泣き出しそうでした。

「そんなわけにも参りませんが、どうでしょう、この男を泊めて下すっちゃ、——年は若いが、これなら女護ガ島へ転がしておいても大丈夫で」

平次はそう言いながら、ニヤリニヤリとガラッ八の鼻を指すのです。

「親分」

驚いたのは八五郎でした。

三

その晩から、ガラッ八は中江川平太夫の家に泊り込むことになりました。家が広いので、奥へは主人の平太夫、お勝手の側の居間にはお琴が一人、ガラッ八は店を直して格子をはめた表の部屋に宵から暁方までもぐり込むことになったのです。

大名の話から、お琴の噂まで出た後で、ガラッ八も最初は渋りましたが、向柳原の叔母の家においても、親分の平次の家においても、居候に変わりはないのですから、結局晩酌と御馳走と、お琴の美しさを満喫するのが景物で、少しは良い心持にウカウカと二三日過してしまいました。

それは四日目の朝。

「八、両国まで一緒に来いッ」

「応ッ」

めずらしく平次に誘さそわれた八五郎は、少し極り悪く中江川の家から飛出し、平次を追って一気に両国まで。

「何かあったんで？ 親分」

「広小路の酒屋へ入ったよ」

「へエ——」

「手口はいつもの通り、庇ひさしを渡って天窓から入り、手代が一人斬られて、盗られたのは百両ばかり」

そんな事を言ううちに、二人は弥次馬に取囲まれた酒屋——ます枡屋伝七——の前に立って居りました。

「親分さん、大変なことになりました。この通り」

飛んで出たのは主人の伝七です。指さした方を見ると、庇ひさしに掛けた梯子、最初はそれを渡って楽々と天窓をコジあけ、隣の部屋にいた手代を虫のように殺して、次の間の用筆ようだんす笥から百両余り入った主人の財布を盗って逃げた——と思われました。

しかし、不思議なことに、此処でも、梯子は庇に掛けたまま使った様子はありません。横木に少しの泥も付いては居ず、二本の脚が、柔かい土にメリ込んでも居ず、梯子を掛けた竹の古い雨樋も、少しも傷んではいなかったのです。手代は、寝たまま喉を刺されて、夢から死への無慙な往生を遂げたらしく、凄まじい血潮の外には、何も変わったものはありません。

「この泥棒には人間の心がない」

平次はツクツクそう言いました。今までの手口から見て、無恥むちで、残酷で、手加減も遠慮もないところを見ると、どう斟酌しんしゃくして考えても、人間らしい心の持主とは思えなかったのです。

「隣は？」

「空家でございます」

「その隣は？」

「かるわざ軽業の小屋で」

「行つて見よう、八」

平次はガラッ八をさし招くと、路地を拾つて、軽業小屋の裏木戸から入りました。

「御免よ、——誰か居ないのかえ」

「へエ——」

ヌツと顔を出したのは、五十年配の人摺^すれのした男。平次とガラッ八の顔をまぶしそうに眺めます。

「ここに誰と誰が泊つて居るんだ」

「へエ——」

五十男の顔から、不敵な忿懣^{ふんまん}が消えると、それが次第に恐怖になつて行く様子です。

「俺は神田の平次だ。朝早くから気の毒だが、ツイ其処に人殺しがあつたんだ。念のため小屋に泊っている男の顔を見ておきたい。皆なここへ呼出してくれ」

「へエ——」

銭形の平次と気が付くと五十男はアタフタ小屋の中に駆け込みます。

後で解つたことですが、これが木戸番の三太。その声に応じて、ゾロゾロと出て来たのは、太夫元の権次郎、竹乗りの倉松、はやしかた囃方の喜助、それに女が二三人、朝といつても、かなり陽が高くなっているのに、思い切つて自墮落^{じだらく}な風を、ズラリと裏木戸に並べた

ものです。

「親分さん、何かよくねえことがあったそうで」

権次郎は四十男のしたたかげな額を撫でて、ヒョコヒョコとお辞儀をしました。

「全くよくねえ事だよ、枡屋の手代が殺されて、百両ばかり盗られたんだが、泥棒はこの小屋の庇ひさしから、空家の屋根を伝わって、枡屋の庇へおり、天窓をコジ開けて入っているんだ」

「へエ——」

「板庇こわが毀れて、木端こっばが路地に落ちているから、その見当に間違いはねえつもりだ。ところで、この小屋の庇から、隣の空家の屋根までは一間半はあるだろう、あれだけ無造作に飛付ける人間は、ここに幾人いるんだ」

「——」

権次郎は黙ってしまいました。その後ろに蒼くなって顫ふるえているのは、竹乗りの名人倉松、地上三間あまりのところを庇から屋根へ楽々と飛移る芸当の出来るのは、軽業小屋の中にも、この男の外にはありません。

「倉松とか言ったね、竹乗りは鮮あざやかだということだが、ちよいと身体を見せてくれ」

「へエ——」

平次は、ガラッ八に眼配せすると、二人がかりで、倉松の身体を調べました。あわてて絆纏はんてんを引っかけて、襟も裾も合っては居ませんが、他には別に不審かどの廉もなかったのです。

「ゆうべ寝た場所と、お前の荷物を見せて貰おうか」

「——」

黙って案内したのは、汚い楽屋^{がくや}。男たち三四人はそこに雑魚寝^{ざこね}をする様子で、まだ床も敷きつ放しですが、何の変ったところもなく、倉松の荷物という、小さい竹行李^{たけごうり}を、引くり返して調べたところでも、着換えの袷の外には何にも出て来ません。

平次はがっかりした様子で外に出ました。

四

「親分、あてが外^{はず}れましたね」

ガラッ八、犬っころのようにその後に従います。

「外れるものか——皆な思つた通りだよ」

「だって何にも証拠はないじゃありませんか」

「証拠はあり過ぎるよ」

「へエ——」

「たとえば、これだ」

平次は裏木戸の外^{ちよつと}の一寸人目につかぬ物蔭^{しやが}に踞^{すわ}むと、泥と血に塗^{まみ}れた、匕首^{あいくち}を一口^{ふり}持って来ました。

「おや？ そいつは何処^{どこ}に？」

「溝板の隙間に打ち込んであったよ」

「それじゃ、あの野郎だ。しょつ引いて行きましようか」

「待て待て、少し腑^ふに落ちない事がある」

平次は元の小屋に引返すと、その匕首^{あいくち}を皆なに見せました。

「小屋の道具でないことは確かで——第一、そんなによく切れるのは危なくて、舞台へ持出せやしません。尤も、銘々^{めいめい}どんなドスを隠して持っているか、それまでは解りませんが——」

権次郎の言うことは一向取止めもなかったのです。

「この演^だし物に、縄抜けがあつた筈だが」

平次は不思議なことを訊きます。

「それは、倉松の十八番でございますよ」

権次郎はこの上もなく無造作な調子でした。

「抜けるのは倉松だろうが、縛るのは誰だい」

「お客に縛って頂きます。——お客が引込み思案で出て下さらない時は、三太がやりますが」

「ちよいと、此処でやって見てくれ」

「へエ——」

権次郎も倉松も変な顔をしましたが、銭形平次の望みに^{そむ}反きようもなく、舞台上で使う細引を持って来て、木戸番の三太の手で、キリキリと倉松を縛って見せました。

「もうそんな事でよからう、抜いて見てくれ」

「——」

倉松は何か襲われるような心持らしく、引っ切りなしに平次の顔を見ております。これが、何時^{いつ}、本縄に変わるかも知れないと思うのでしよう。

でも、二度平次に催促^{さいそく}されると、芸人らしく、はつきり見得を切って、

「え——ッ」

気合が一つ、縄はゾロゾロと解けて、死んだ蛇のように、倉松の足許に這います。

「御苦勞御苦勞、それでいい、——飛んだ邪魔をして済まなかった」

平次は、丁寧^{ていねい}に礼さえ言^まって、小屋の外へ出るのでした。

「親分」

暫らくすると、ガラッ八はたまり兼ねた様子で声を掛けました。

「何だい、八？」

「倉松の野郎を縛^{はく}らないんですか」

「無駄だよ」

「？」

「縄^{なわ}抜けの名人だ、縛^{はく}るだけが野暮^{よこ}さ」

「へエ——」

「それに倉松は縄^{なわ}を抜けるのが渡世^{とせ}で、縛^{はく}る方は得手^{とく}じゃなかったんだ」

ガラッ八は、不服^{ふく}そうに頬^ほを膨^{ふく}らせます。

「それより、あの娘^{むすめ}の方はどうした？」

平次は話題^{わだい}を変^かえました。

「娘^{むすめ}？」

「知らばつくれちゃいけねえ。中江川のお琴^{おこと}さんだよ。用心棒^{しんぼう}に手前^{てまえ}をおくのは何^{なん}の為^{ため}だと思う」

「——」

ガラッ八の顔^{かお}は見物^{けんぶつ}です。

「あきれた野郎^{やろう}だ、若い娘^{むすめ}と三日^{さんじつ}も四日^{よっぴつ}も鼻^{はな}を突き合^あせているくせに、まだ埒^{らち}が明^あかねえのか」

「親分」

「手前^{てまえ}は、あの娘^{むすめ}を女房^{にようぼう}にしたいって言^いったろう。だから、俺^{おれ}は粹^{すい}をきかして、手前^{てまえ}を用心棒^{しんぼう}にしてやったのさ。中江川^{なかつがわ}さんは年寄^{としより}で、眼^めも耳^{みみ}も遠^{とほ}いから、三日^{さんじつ}経^へたないうちに、手前^{てまえ}とお琴^{おこと}さん



は、夫婦約束くらい出来るだろうと思ったんだ。——相惚れの仲
人^{うど}実は廻し者——ってね、それから俺が乗出して口をきくのさ」
平次はそんな事を、面白そうにまくし立てるのです。

「だって無理だよ、親分、ああ見えても武家の娘だ」

「武家の娘が何だい、——それともお琴さんが二本差していると
でも言うのかい」

「弱ったなア」

「弱ることなんかあるものか、——どうせ年寄は早寝だろう」

「そりゃ、宵には奥へ引込むが」

「それから手前へ晩酌^{ばんしゃく}が出るだろう、——酔った勢いで、何とかな
らないものかね」

「あれでも武家の娘だ。綺麗なだけで大した俐口じゃあるまいと
思ったが、どうしてどうして」

「手前より惻口だと解ったのかい、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、こいつは大笑いだ」

何が面白いのか、カラカラと笑う平次。その羽目はずした調子を、ガラッ八はムツとした心持で見詰めるのでした。

五

それから三日の間に、兇賊は三カ所を荒し廻りました。質屋と、呉服屋と、女隠居と、——中でも末広町の女隠居は、あんまり金を深くしまい込んで、さすがの曲者くせものも捜し兼ねたものか、叩き起して刃物で脅かし、落しの中の石畳の下にあった、百二十両の小判のありかを言わせてしまいました。

その時、曲者の姿を、臃ろおぼろ気ながら見てしまった女隠居は、危うく殺されるところでしたが、曲者は暁近い外部おもての人通りにおどろいて逃出し、すでに刃やいばを喉笛に擬せられた女隠居は、危ういところで命を助かったのです。

平次とガラッ八が、朝のうちに駆け付けて、まだ驚きと怖れからなおり切らぬ女隠居の口から、一生懸命訊き出したことは言うまでもありません。

女隠居は、六十前後、嘗ては日本橋あたりの大店の主人おおだなの囲い者だったそうで、下女一人を使つて、つつましく暮しておりまして。

昨夜はちょうど下女を葛西かさいの在所に帰して、たった一人淋しく過していると、夜中過ぎに、天窓をコジあけて、覆面ふくめんの大男が入つて来たというのです。

「大男——？ それは本当かい」

「へエ、大きな男でございましたよ。頭巾を冠ったままで、よくは解りませんが、声の様子ではまだ若そうで」

「下女は長く奉公しているのかい」

「五六年も居りますよ。大の忠義者で、まだ三十そこそこのでしよう。一度縁付いたそうですが、不縁になって私のところへ参り、もう一生動かないといって居るくらいで、へエ」

「葛西かさいの在から、使でも来たんだろうな」

「口上で、——母親が加減が悪いから一と晩泊りでも来るようにと、百姓衆が言つて来ました」

「下女の知っている人かい」

「いえ、村の人じゃない——と言いました」

こんな事は、いつまで訊ねて居ても際限ありません。いずれは偽使に決つて居るようなものです。

「昨夜ゆうべの事を、もういちど詳しく話して貰おうか」

平次は女隠居の言葉を、くり返して検討する積りでしよう。

「子刻ここのつが鳴つてから寝付きましたから、丑刻やつ近かつたかも知れません。変な音がして眼が覚めると有明の行燈の前に、真っ黒な男が立つて居るじゃありませんか」

「確かに男だね」

「それはもう親分さん、——飛起きて声を立てようとすると思ひ襟えりくびを押えて枕に仰向に押付けられ、喉笛を脇差でピタピタと叩くじゃありませんか」

その時の事を思い出したか、女隠居はゾッと身を顫わせました。「何にも物を言わなかったのか」

「——金を出せ——ただそれだけです。何にも言いません。それつきり黙りこくって、四半刻もジツとして居るんですもの、命より惜しい虎の子だって隠し切れるものじゃありません」

奪い取られた百二十両の惜しさが、身に滲しみみたまものか、女隠居はこの時はじめてポロポロと涙をこぼしました。

「声は？」

「低い声で、——聞いたことのあるような、ないような——」

「仕方がないから、落しの中の、石畳の下に、虎とらの子を隠してあることを言いました。すると、私の胸倉を掴んだまま行って、落しを開けて黄八丈の財布に入れた、百二十両の小判を取出し、憎らしいじゃありませんか、ゆうゆうと勘定までして自分の懷わきざしろに入れ、それから元の部屋に帰ると、もういちど脇差わきざしを抜いて、この私を——」

女隠居は自分の喉のあたりを指しながら、恐怖に絶句したのです。

「それから」

「どうせ、姿を見られると、決して助けては置かない泥棒だと聞いていたので、私も観念しました。——観念したくないにも、声が出なかったのです。思わず念仏を称えと、泥棒はあわてて私の胸倉を突放し、蒲団の中へ私を押込んで、裏口から飛ぶように逃出してしまいました」

「外で物音でもしたのかい」

「物音がしたかも知れませんが、私には聞えません。私はもう生きた心地もなかったので、聞き落したのでしょう。泥棒があんな

にあわてたところを見ると、人声か足音か、何か聞えたに違いありません」

「時刻は？」

「間もなく丑刻半だっと思います」

「暁方と言っても、まだ人の通る時刻ではないな」

平次はいろいろの事を考えている様子でした。

「どうしたらいいでしょうね、親分さん。あの百二十両を奪られてしまったては、私はもう明日から暮しようがありません」

女隠居は命に別条のないことをはっきり意識すると、次第に盗まれた百二十両が惜しくなったものらしく、頼み少ない姿で、悲嘆にくれるのでした。

「泥棒はきつと捉まえてやる、——もう少し落着いて、俺の言うことを聴いてくれ」

「――」

「泥棒の足を見なかったかい、何を履いて居たか」

「跣足でしたよ。はだし尤も懷ろへ草履か雪駄を入れて居るのがチラと見えましたが」

「八、聞いたか、泥棒は履物を懷中へ入れて居たとよ。以前は泥の付いた履物のまま、畳の上も蒲団の上も踏み荒した泥棒が、この間から馬鹿にお行儀のよくなったのに、手前も気が付くだろう」
「そう言えばそうですね」

八五郎は一応うなずきました。が、それはどんな意味のあることか解りそうありません。

「此処でも梯子は使わなかったようだな。ところで、お婆さん、外に気の付いたことは？」

平次はまだこの女隠居から引出せそうな気がしたのです。

「頭巾の下から、切り揃えた毛が少しはみ出して居たようですよ」

「何？ 頭巾の下から、切り揃えた毛？ さア大変だ、八？」

平次は躍り上がりました。

「そいつは何でしょう、親分」

「たしかに女でないなら、そいつは総髪だ。総髪にしている男というと——」

「医者か、八卦か、法印か——」

「しめたッ」

平次は新しい光明に臨んで驀地に飛出しました。

六

神田から下谷日本橋界限に、総髪姿で身体の引きそうな男という、筋違見附外に大道易者をしている、浪人大谷道軒の外にはありません。

「八、下っ引を二三人呼んで来い、相手はうんと手剛いぞ」

「大丈夫ですか、親分」

「大概大丈夫なつもりだが、——念のため筋違見付を覗いて行こう」

二人は一気に筋違見附へ——。

そのころ筋違見附、今の万世橋の袂は、丸ノ内、日本橋から、上野へ、甲州街道への要路で、警戒の嚴重なところであり、人出の多いところでもありました。

見附外の少し離れた空地、三脚の台を据え、天眼鏡を構えた易

者は、ときどき編笠を取って汗を拭きませんが、無精髪ぶしようがみの総髪、まだ四十そこそこの屈強くつきような男です。

「八、止そう」

平次は張り切った肩を落しました。

「どうしたんで？ 親分」

「総髪は江戸に何十人あるか解らねえ、迂闊うかつにあの易者を縛って、物笑いになるのもイヤだ」

「それじゃ、あの野郎の家へ行って、家捜ししようか」

「家は何処どこだい」

「鍋町の源助店だなで」

「いやな事だが、それも仕方があるまいな、行ってみよう」

二人は鍋町へ引返しました。

源助店の路地の外に、ガラッ八を見張りにおいて、道軒の家へ潜りもぐ込んだのは平次たった一人。

それから一刻あまり、近所の思惑をはばかりながら、平次は一生一代のいやな家捜しを続けました。

何処にも、血の附いた脇差も、小判の片かけらもありません。天井も、床下も、押入も、蒲団の中も見ました。

「ありませんか、親分」

ガラッ八はたまり兼ねて入って来ました。

「何にもないよ、浪人者にしては、念入りの貧乏だな」

「その仏壇は？」

「盗んだ金を、入口から見透しの仏壇へ入れて、御先祖様にお目にかける奴もあるめえ、——が待てよ、外の考えようもある」

平次はもう一度ひき返すと、仏壇の中を念入りに見た上、下の

抽斗ひきだしも嘗なめるように調べました。

「おや？」

抽斗を抜いて、その奥へ手を突っ込むと、何やら指先に触れるものがあるのです。ズルズルと引出して見ると、

「親分」

八五郎は思わず喊声かんせいをあげました。黄八丈の財布が一つ、抜いて見ると、中から出たのは、数も百二十枚、ゆうべ女隠居が盗られたという小判まぎに紛れありません。

「――」

平次は黙って考え込んで居ります。

「親分、見附へ行つて見ましよう。気が付いてずらかっちゃ一大事」

「騒ぐな八、まだ縛るには早い。去年の暮から諸方で盗った金はどう積つても千両以上だ。ここにあるのは百二十両、あとの金が出ねえうちは、滅多に縄を打つわけには行かねえ」

「だって親分」

「まア、いい、俺に任せておけ、――この事は人に言うな」

平次は黄八丈の財布に入つた百二十両を元の引出しの裏に入れると、泥棒猫のように、そつと大谷道軒の浪宅を滑り出たのです。

それから二日目。

「ところで、八」

「へエ――」

平次のところへ行つた八五郎は、妙にくすぐ撥はつたい笑顔に迎えられました。

「あの娘はどうだえ」

「へエ——」

「まだモノにならないのか」

「ありや鑑定めがね違いですよ、親分の前だが」

八五郎は照れ臭く頸筋を叩きます。

「何が違ったんだ」

「あのお琴という娘は飛んだ喰わせものですよ」

「はてね？」

「第一、中江川平太夫の娘なんかじゃありません」

「へエ——」

「二三日は娘らしくして居ましたが、近頃じゃ——」

ガラッ八は頸を縮めて赤い舌を出すのです。

「孫まごかい、娘でなきや——」

と平次。

「親分もどうかして居ますぜ」

ガラッ八の鼻の穴は次第に大きくなります。

「何がどうしたんだ」

と平次。

「不思議なことばかりで、あつしには見当も付かねえ」

「何が不思議なんだ」

「第一、あの平太夫はそんな年寄りじゃありません、髪こそ真つ白だが」

「そんな馬鹿なことがあるものか、第一ヨボヨボして、歩くさえ不自由じゃないか」

「でも——」

「手前気が弱くてそんなつまらねえ事を考えるんだ。待ちな、俺が結構な禁呪まじないを教えてやる。今晚あの平太夫の前で、あの娘を嫁よめにくれと言ってみるんだ」

「そんな馬鹿なことが言える道理はありません。痩せても枯れても向うは武家で、此方はただの岡っ引だ」

「つまらねえ遠慮をするじゃないか。武家でも浪人だろう、手前は十手捕縄をお上から預かる一本立の御用聞だ」

「だって、あの娘は、あつしの事なんか、何とも思っちゃ居ませんぜ」

「居ないことがあるものか。大ありの名古屋だ、畜生奴ちくしょうめツ」

「痛いッ」

平次の手は威勢よくガラッ八の背をなぐったのです。

「それでも文句を言うなら、結納の代りだとか何とか、いい加減な事を言って、これを見せるがいい」

平次は何やら風呂敷に包んだ品を、ガラッ八に持たせるのでした。

「何です、これは」

「浦島うらしまの玉手箱だ、あけちゃならねえ、——耳を貸しな、少し含んで貰いてえことがある」

「へエ——」

「たまには耳も掃除そうじして置くんだけ、いい若い者が、こんな汚い耳をして居ちゃ、お琴さんだって、結構なことをささやく気にもなれないだろうじゃないか」

その晩中江川平太夫の家で、大変な騒ぎが起ったのです。

丑刻^{やつ}少し過ぎ、いつぞや中江川平太夫が心配したように、兇賊が例の天窓から、二度目の襲撃をして娘のお琴を縛り上げ、部屋部屋をあさって、店に寝て居るガラッ八のところまでやって来たのでした。

遠い有明に透^{すか}した曲者は、ガラッ八の上に馬乗りになると、脇差の一と突き。が、その手は宙^{ちゆう}に淀^{よど}みました。何か見当の違ったものを感じたのでしょう。

「泥棒泥棒ッ」

恐ろしい声で、後ろからわめき立てたのは、床に寝て居る筈のガラッ八です——。いや、ガラッ八は早くもこの襲撃を察し、床の中には枕と座蒲団と雑物^{ぞうもつ}を入れ、自分は後ろの戸棚の陰にかくれて、神田中に響き渡るような声を出したのです。

曲者は面喰^きって立ち上がりました。が、ガラッ八の大音声に胆をつぶした上、近所のざわめき始めたのに気おくれがしたらしく、縁側の戸を開けて、パツと外の闇へ——。

「御用ッ」

そこには銭形平次が待っていたのです。

火のような格闘が一瞬庭に展開しました。曲者の脇差^{わきざし}が、幾度か平次に迫りましたが、得意の投銭がそれを封じて、しばらく睨み合ううち、家の中から助太刀のガラッ八が、大音声と一緒に飛出して来たのでした。

×

×

大盗中江川平太夫は、平次と八五郎の手に召捕られ、その夜のうちに南の御奉行所仮牢かりろうに送られました。

娘——と称した、妾のお琴は、逐電ちくでんして行方知れず。その後の取調べで、中江川平太夫は白虎びやっこの平太と異名を取った大盗賊で、三十台に傷寒しょうかんを患わずらって頭の毛は真っ白になりましたが、年はまだ四十そこそこ、ヨボヨボどころか恐ろしい体術の達人で、猿のように梁はりを渡り、庇ひさしを飛ぶ術を知って居たのです。

「驚いたね、親分。平太夫が泥棒と、余っ程前から解ったんですかえ」

ガラッ八は絵解が聞きたい様子です。

「自分の家へ泥棒が入ったと訴え出た時から解ったよ。知恵のある者は、自分の知恵に負けるのさ。あんな細工をしなきゃまだ判らずに居たかも知れないが——町内の物持が皆なやられて、裕福と噂のある自分の家だけ無事では変だと思ったのだろう」

「あの時、何んな事がおかしかったんで？」

「家の中に泥の足跡あしあとのなかったのを第一番に気が付いたよ。自分の家に泥足で入るのはイヤだろうし、それに引窓は内からこわしたんだから、梯子はしこにも及ばなかったんだ——俺がそれに気が付くと、あの後で入った家へは泥の足跡を付けないように用心した上、梯子を一度も使わなかった」

「へエ——」

「お琴を縛るのに、寝巻の上へ袷あわせを羽織からしたのもおかしい。庇かばい過ぎたんだ。それから縄の結び目は、植木屋や仕事師や、船乗や、岡っ引じゃない、あれは小道具の方から来た武道の伝授物だ」

「へエ——」

「俺に泊ってくれと言うのを幸い、手前を泊めたのは、それとなく二人の間を見張らせる為さ。平太夫がそんなに年寄でないことや、あの女は娘でないことも俺は気が付いていたよ」

「――」

「俺に疑われたと思うと、手前に寝酒をあてがった後で家を脱出し、両国の酒屋に押入って、竹乗の倉松に疑いを被せたり、女隠居にわざと素足や総髪を見せて、飛んでもない方へ疑いを外らせる工夫をしたのさ。あの女隠居はなかなか確り者らしいが、その確り者が命がけで耳をすまして居て聞えない物音を、曲者だけが聞いて逃出す筈はない。あわてた振りをして女隠居を殺さなかったのは、後でいろいろ喋舌しゃべしてもらいたかったからだ」

「――」

「一度は易者の大谷道軒を疑わせたが、どんな馬鹿でも、前の晩盗んだ金を、戸締りもない家の仏壇の抽斗ひきだしに隠す筈はない」

「あの晩、お琴を嫁に欲しいと言わせたのは？」

「平太夫も近頃少し気をもんで居ると解ったからだよ。何しろ八五郎といういい兄さんが、女の側に居るんだからね」

「冗談でしょう」

ガラッ八も少し極りが悪そうです。

「いや、冗談じゃない。髪の毛の白い弱身よわみで、それ位のことはあった筈だ」

「あの包の中は？」

「黄八丈の財布と、手代を刺したあいくち匕首と、お琴を縛った細引の結び目と、――それから毛の先を切ったかもじさ、それを頭巾の下に冠そうはつって総髪に見せたんだ」

「何処からそんなものを」

「一度使った物を、あれほどの悪党が持っている筈はない。いずれは何処かへ捨てたに違いないと思ったから、かもじ屋から新しく買つて来て、ちよいと先を切つて間に合せたのさ」

「へエ——」

ガラッ八も開いた口が塞がりません。

「あの晩、いつもの通り飲んで寝ちや、手前の命はなかった筈だ、——だから、悪いことは言わねえ、武家の娘などに思いをかけるより、煮売屋のお勘子で我慢して置くのさ、その方が命だけでも無事だぜ」

「へッ」

ガラッ八は苦笑いをして、ピシヤリと額を叩きました。

「煮^{にしめ}べを腹一杯食つてよ、町内のお湯を買い切つて三日ばかりつかつて見ねえ、こいつは大名にもない贅^{ぜい}だぜ」

平次はそう言つて、カラカラと笑うのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十三年六月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第四卷 河出書房 昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>